



豹頭の仮面／荒野の戦士  
(Guin Saga ①、②)／  
栗本 薫／早川書房(文庫  
・① 9/30、② 10/15刊・  
各¥320)

平和な王国バロは、突然のモンゴル軍の襲撃を受け壊滅する。混乱の中を、バロの遺児リンダとレムス(王女と王子)は、辛うじて脱出する。だが、たどり着いたルードの森で、二人は豹の頭を持つ奇怪な戦士グインと出会うのだった……。かくして、全四十巻に及ぶという、グイン譚が開幕するわけだ。

「毎月行き当たりばつたりのように書きついで行く」これは、国枝史郎の作品『神州緞緞城』等の魅力を評した半村良の言葉である。

作家が一生のうちに、どれだけの作品を書けるのかは分からない。ただ、無限の広がりを感じさせる尽き果てぬ物語が、たとえば国枝の場合、未完の『葛葛』や『神州』であったように、終わることのない物語を、十分な構成力で書き終えるのは大変難しい。だが、栗本薫はあえてそういう書き方をする。スタフォロス城主のヴァーノン伯が、緞緞城主とそっくりな描かれている点からも著者の「挑戦」が窺えるだろう。全四十巻で国枝の大長編に匹敵する広がりがあるかどうかわからないが、まずは、作者のお手並みに注目したい。

物語は、二巻目までで、双子が宿敵の公女と出会うまでが、軽快に描かれている。(俊)